

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第 20 号）

『飛鳥・藤原の宮都』の世界遺産登録：第 48 回世界遺産委員会」

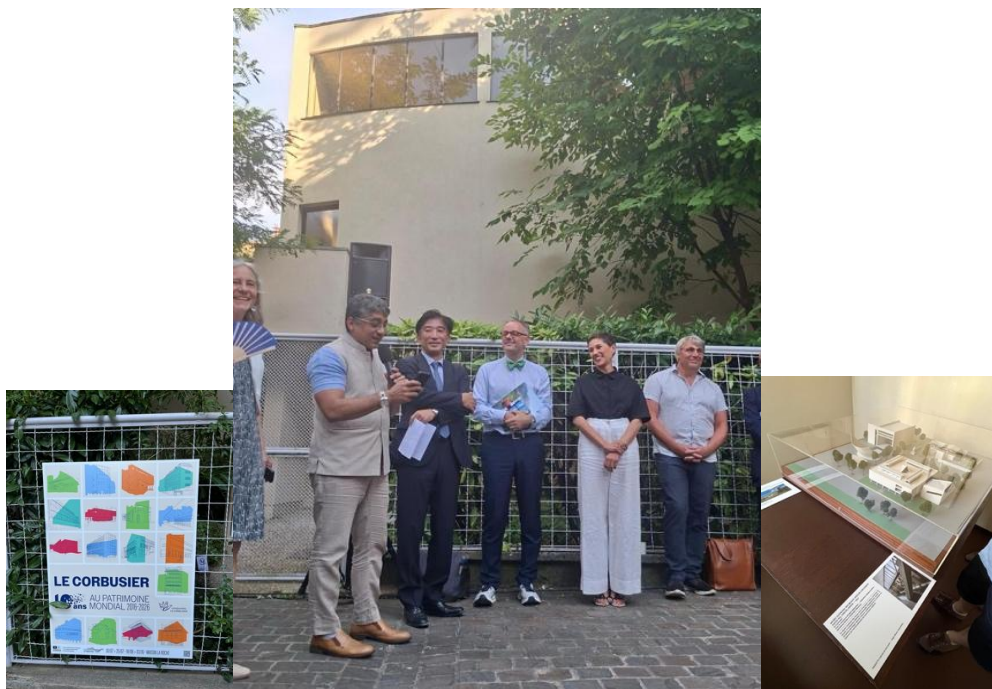
2026 年 8 月 7 日

ユネスコ日本大使の加納です。

パリも日本も暑い日が続きますね。

夏はユネスコでは世界遺産委員会の季節です。私が着任してから出席した世界遺産委員会は、一昨年の第 46 回会合はインドのデリーで、昨年の第 47 回会合はパリのユネスコ本部で開催されました。今年は韓国の釜山でした。

釜山出張前の 7 月 7 日には、パリ 16 区のル・コルビュジエ財団が入るメゾン・ラ・ロッシュにて、同財団主催により、「ル・コルビュジエの建築作品」の世界遺産登録 10 周年を記念するイベントが開催されました。2016 年に 7 カ国にまたがるル・コルビュジエの建築作品が登録されており、日本では上野の国立西洋美術館がそれにあたります。イベントには、ル・コルビュジエ作品のあるフランス、ドイツ、スイス、インドの大使とともに出席しました。



各国大使と共にル・コルビュジエ財団主催イベントに出席（中央）。国立西洋美術館の当初設計の模型（右）。

今回は、世界遺産委員会についてご紹介します。

（韓国・釜山での第４８回世界遺産委員会）

今年の世界遺産委員会（第４８回）は、韓国の釜山で７月１９日から２９日まで開催されました。

私自身が釜山を訪れるのは２００５年の釜山ＡＰＥＣの準備で訪れて以来、約２０年ぶりです。当時竣工して間もない国際会議場（ＢＥＸＣＯ）が今回の開催場所でした。



第４８回世界遺産委員会の会場となった国際会議場（ＢＥＸＣＯ）

世界遺産委員会が韓国で開催されるのは今回が初めてです。初日１９日のオープニング・セレモニーには、李在明（イ・ジェミョン）大統領が出席し、ＫＰＯＰスターや韓国のアーティストもパフォーマンスを披露するなど、韓国側の熱意が感じられました。

議長を務めたのは、元外交官のイ・ビョンヒュン（Lee Byong Hyun）大使です。イ大使はかつてユネスコ韓国大使を務め、執行委員会議長や無形文化遺産委員会議長の経験もあり、ユネスコの業務に精通しています。私自身は、同大使が４月にパリを訪れた際に初めてお会いしましたが、大変気さくな方でした。



第48回世界遺産委員会議長を務めたイ・ビョンヒュン大使（写真出典：ユネスコ）

世界遺産委員会は6地域グループ・21カ国の委員国で構成されます。

昨年11月の選挙で約半数が改選され、現在の委員国は以下のとおりです。

グループ1（西欧・北米）：トルコ、スイス

グループ2（中東欧）：ウクライナ、アゼルバイジャン、アルメニア、
チェコ、ポーランド

グループ3（中南米カリブ）：ジャマイカ、ペルー、グレナダ、

グループ4（アジア太平洋）：ベトナム、韓国、カザフスタン、
バングラデシュ、モンゴル、

グループ5（アフリカ）：ケニア、セネガル、タンザニア、トーゴ

グループ6（アラブ）：レバノン、クウェート

世界遺産候補案件の審査・登録など、世界遺産委員会の全ての決定はこの委員国により行われます。

日本は、昨年で4年の任期を終えたので（再任は不可）、今回から6年間はオブザーバー国として参加することになります。

実質的審議が始まった20日からは、冒頭、エルアナーニー・ユネスコ事務局長によるスピーチ、オブザーバー参加リストの承認、議題採択から始まり、

世界遺産センターの活動報告、アフリカや小島嶼開発途上国（SIDS）支援関連議題の討議と続きます。中盤から後半にかけては、個別の登録資産の保全状況報告の審査や、最も注目を集める新規登録案件の審査が行われます。最後に予算、次回委員会についての議長の選出や暫定議題の策定がなされ、一連の会議の報告が承認されて終了します。約10日間の長丁場です。

日本はオブザーバー国ですので、個別案件の審査には携わりませんが、アフリカやSIDS諸国への支援を行っていますので、関連議題において随時ステートメントを行いました。



世界遺産委員会の様子

（飛鳥・藤原の宮都の世界遺産登録）

日本にとって今回の委員会のハイライトは、もちろん「飛鳥・藤原の宮都」の新規登録でした。6世紀末から8世紀初め、仏教が伝来し、中国大陆や朝鮮半島の影響を受けながら、日本が中央集権国家を成立させた時期であり、当時の状況を示す19資産（宮殿・官衙跡、寺院跡、墳墓）が世界遺産の登録対象となっています。

日本政府は昨年1月に正式に推薦書を提出し、その後、諮問機関（イコモス）の現地調査受け入れや、追加情報の提供を行い、委員会開催前の本年6月にイコモスから世界遺産リストへの「記載」勧告を受けました。これは、イコモスが出す4種類の勧告のうち最上位のものです。日本からの推薦内容が高く評価されたわけであり、登録に向けた大きな前進として、非常に勇気づけられるものでした。

もっとも最終決定は上記21カ国からなる世界遺産委員会でなされます。こ

これらの国々に「飛鳥・藤原」の価値をしっかりと理解してもらう必要があります。委員会に先立ち、様々なルートで説明を重ねてきたところですが、釜山での委員会が始まった前半には、堀井巖・外務副大臣が現地入りして、各委員国に最後の働きかけを行いました。



世界遺産委員国タンザニアの代表と会談を行う堀井外務副大臣（写真出典：ユネスコ）

新規登録の審査は委員会も後半に入った24日から始まり、日本の「飛鳥・藤原」は26日午前の2番目に審議されることとなりました。



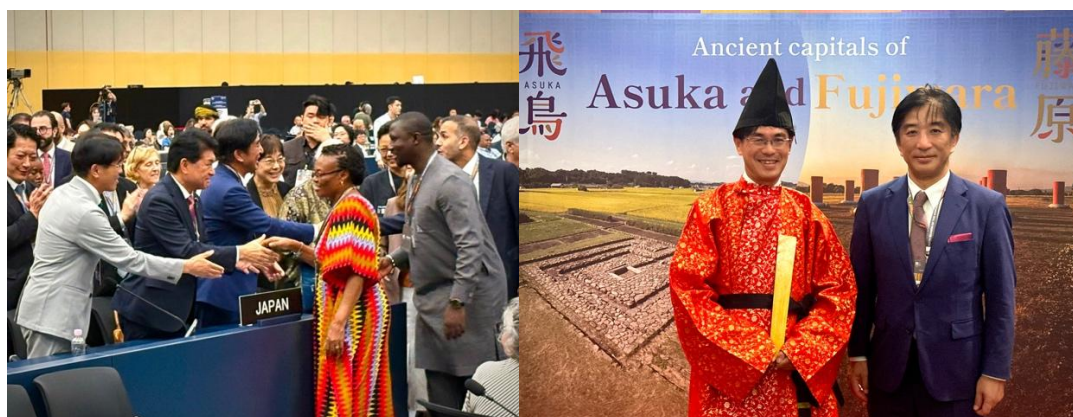
「飛鳥・藤原の宮都」の世界遺産登録審議に臨む日本側代表团（写真出典：ユネスコ）

当日までに小林茂樹・文部科学副大臣、山下真・奈良県知事、「飛鳥・藤

原」の登録に尽力してこられた議員連盟に所属する三名の国会議員（田野瀬大道・衆議院議員、佐々木紀・衆議院議員、鈴木英敬・衆議院議員）らが現地入りし、審議本番を迎えました。

実際の審議は極めてスムーズでした。まず、イコモスの専門家が案件の概要と本件が登録に相応しいとの勧告内容の説明を行い、議長が直ちに登録決議案の審議に入り、特に異論もなく採択されました。この瞬間は日本のテレビでも報道されていたので、ご覧になった方も多いのではないのでしょうか。採択後は、祝福の握手のために多くの各国代表が日本代表団席に歩み寄ってきてくれました。

当日の夜は奈良県主催のレセプションが行われましたが、山下知事も飛鳥時代の衣装を纏ってタイムスリップしながら、「飛鳥・藤原」の世界遺産を将来世代に伝える決意を語っておられました。



「飛鳥・藤原」の登録直後の模様（左）と奈良県主催レセプションにおいて山下知事と（右）

なお、今回の会合では、日本関連では「飛鳥・藤原」のほか、2年前に登録された「佐渡島の金山」の保全状況報告も審査対象でしたが、事務局作成の決議案が議場で討議されることなくコンセンサスで採択されました。この決議では、世界遺産登録時の決議で勧告された事項の大部分に日本が対応したことを歓迎しつつ、「全体の歴史」に関する対応や遺産の保護に関する技術的な指摘への対応を求め、来年12月に報告書提出、再来年の第50回世界遺産委員会での審議を求める内容となっています。

また、今回の会合の終盤、個別案件の審査が終わり議場内の各国代表の姿もまばらになった中で、韓国代表が「明治日本の産業革命遺産」について発言し、日本の対応は不十分でありコミットメントを履行すべきとの見解を述べま

した。これに対して私からは、日本はこれまでの世界遺産委員会の決議を真摯に受け止め誠実に対応してきており、この立場は不変である、今後とも関係国との対話を世界遺産委員会の枠外で行なっていく旨の答弁を行いました。

新規案件と既存案件とを問わず、世界遺産委員会の審議をスムーズに乗り切るには、会議の進行を支えるユネスコ事務局（世界遺産センター）との連携は欠かせません。今回の会合の期間中も、事務局関係者と頻繁に意思疎通を行いましたが、おかげで日本関連案件の審議は全て無事終わることができました。



アソモ世界遺産センター長との打ち合わせ（写真出典：ユネスコ）

（アフリカから3カ国が初の世界遺産登録）

今回の世界遺産委員会では、新たに25件の世界遺産が登録されました（文化遺産が19件、自然遺産が5件、複合遺産が1件）。この中で、自国で初めて世界遺産が登録されたのが、アフリカのコモロの「コモロの歴史的スルタン国のメディナ群」、サントメ・プリンシペの「サントメ・プリンシペのロサス：植民地農業システムと強制移住」、南スーダンの「ボマ・バンディギロ回遊景観」の3案件です。世界遺産条約締約国196カ国のうち、これまで世界遺産が一つも登録されていない国は26カ国あり、エルアナーニー事務局長もこれらの国々への支援を訴えています。今回の会議で23カ国に減ったことになります。

コモロからは大統領が出席し、喜びの感謝スピーチを行いました。世界遺産委員会に国家元首が出席するのは初めてのことです。



自国初の世界遺産登録を受けて感謝スピーチを行うコモロの大統領（写真出典：ユネスコ）

サントメ・プリンシペと南スーダンからはそれぞれ文化大臣が出席しましたが、両大臣からはスピーチの中で、世界遺産登録に至る過程における日本の支援に対する感謝の辞が述べられました。両大臣とは個別に意見交換も行いました。日本は、より多くのアフリカの国々が世界遺産を登録できるよう、キャパシティ・ビルディング支援を行なっています。昨年のギニアビサウ、シエラレオネに続き、今回も新たな資産保有国が生まれることに日本が貢献できたのは大変喜ばしいことです。



初の世界遺産登録の感謝スピーチを行なったサントメ・プリンシペの文化大臣（左写真出典：ユネスコ）



初の世界遺産登録の感謝スピーチを行なった南スーダンの文化大臣（左写真出典：ユネスコ）

（米国、イスラエルの存在感）

アフリカとは別の意味で存在感を放っていたのが米国とイスラエルです。

昨年7月にユネスコからの再脱退を表明した米国は、本年末に正式にユネスコから脱退することになりますが、実際には昨年からのユネスコの会議には姿を見せていません。イスラエルは既にユネスコからは脱退しています。しかしながら両国とも世界遺産委員会には代表団を送ってきていました。

実は、米国、イスラエルとも世界遺産条約の締約国であり続けています。米国は過去にユネスコを脱退した時も世界遺産条約からは脱退しておらず、イスラエルも同様です。

ただ、今回、米国は締約国としての正式な代表団登録は敢えて行いませんでした。一方で、新規の世界遺産登録候補として「オケフェノキー国立野生生物保護区」を推薦していたため、議場には多くの米国関係者がおり、登録決定の際は、米国のプレートのないオブザーバー席からステートメントを行うという、異例の対応でした。

一方、イスラエルは締約国として代表団登録を行なっていました。今回の委員会で世界遺産に緊急登録され、かつ危機遺産リストに登録された、レバノンの「アメル山の城郭群」、パレスチナの「セバスティア」について、イスラエルの立場からステートメントを行なっていました。



国名プレートのないオブザーバー席から世界遺産登録の感謝スピーチを行う米国代表团（写真出典：ユネスコ）

（サイド・イベント）

世界遺産委員会の期間中は、参加各国・団体により様々なサイド・イベントが開催されます。世界遺産に対する主催者の問題意識を理解する上で有益な機会です。私は特にアフリカに関心があったので、ケニア、ウガンダ、タンザニアが主催するサイド・イベントに参加しましたが、いずれも盛況で、世界遺産委員会におけるアフリカの存在感が増していることを実感しました。

ケニア主催のイベントは、昨年ナイロビで開催した文化遺産の「真正性」(authenticity)に関する国際会議において各国専門家から出された論文をまとめた書籍出版を記念するものです。この書籍は下記のリンクでアクセス可能です。冒頭には、エルアナーニー・ユネスコ事務局長、ルト・ケニア大統領、ングレ・ケニア・ユネスコ大使らと共に私も序文を寄せています。

<https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-92-2619-1>

一連のプロジェクトではユネスコ・ナイロビ事務所の長岡正哲職員が中心的な役割を果たしており、今回のイベントでもパネリストとして参加していました。この会議を支援した日本政府代表部も今回のイベントには共催者として加わり、私も冒頭挨拶を行いました。



ケニア主催イベント（日本も共催）の様相

ウガンダは、私も昨年ナイロビ会議の合間に立ち寄り、日本が危機遺産リストからの除外に貢献した世界遺産「カスビのブガンダ王国歴代国王の墓」を訪れたところです。今回のイベントでも日本の支援への謝意が述べられていました。

タンザニアのイベントでは同国の世界遺産（自然遺産）「ンゴロンゴロ保全地域」の課題として、人口と野生動物個体数の増大に伴う住民と野生動物の間のトラブルが取り上げられていましたが、過疎地域での住民とクマのトラブルに直面する日本との比較が思い浮かび、興味深く耳を傾けました。



ウガンダ主催イベント担当者との懇談（左）（写真出典：ユネスコ）、タンザニア主催イベントのパンフレット（右）

日本からは、「文化遺産国際協力コンソーシアム」（JCIC-Heritage）によるシンポジウムが開催されました。JCIC-Heritage は文化遺産保護のための国際協

力を推進する産官学民のプラットフォームとして２００６年に設立されたもので、初代会長はユネスコ親善大使も務めた画家の故平山郁夫氏が就任しています。

今回のシンポジウムは設立から２０周年を記念したのですが、日本人専門家によるエクアドル、バーレーン、タンザニアでの協力事例の説明や、これまで JCIC-Heritage と協力してきた各国専門家によるパネルディスカッションがあり、文化遺産保護における日本の国際協力の蓄積が実感できる内容でした。



文化遺産国際協力コンソーシアムによるシンポジウムの模様

（開催国・韓国の文化・歴史体験）

今回の世界遺産委員会は、議論が紛糾して進行が遅れがちでオフの日もなかったため、会議場の外に出る機会はありませんでした。

それでも、日本として発言機会がなく時間的余裕ができた日に、半日会議場を抜け出すことが出来ました。訪れたのは、釜山にある国立博物館と、国連平和記念館です。

釜山の国立博物館の常設展示は、釜山という土地柄に重点を置きつつも、韓国の古代から現代に至る歴史について概観できる展示内容になっています。また、期間限定で朝鮮王朝時代の文書遺産の特別展が行われていましたが、江戸時代に日本の幕府に派遣されていた朝鮮通信使関連の展示が充実していました。ちなみに朝鮮通信使については、２０１７年に関連文書がユネスコの「世界の記憶」遺産に登録されています。今回の世界遺産委員会の会議場の外でも、朝鮮通信使の衣装を纏ったパフォーマンスが行われていました。



釜山の国立博物館（左）と世界遺産委員会会議場での朝鮮通信使のパフォーマンス（右）

国連平和記念館は、１９５０年に勃発した朝鮮戦争と、これに対処するため設立された国連軍についての展示がされています。朝鮮戦争の初期、北朝鮮の侵攻によりソウルを含め朝鮮半島の大半が占領された際、釜山は韓国の臨時首都としての機能を果たしていました。



国連平和記念館

釜山滞在中は、様々な韓国料理を堪能しました。



韓国料理を連日堪能

ブルコギ（焼肉）に冷麺、テジクッパ（豚骨スープ料理）、ナッコプセ（タコ、エビの入った辛い鍋料理）など、ほぼ毎日、何らかの韓国料理を食べていました。珍しかったのは世界遺産委員会出席者向けに韓国側がアレンジしてくれた禅寺訪問と、そこで出された精進料理です。野菜だけのヘルシーな料理でした。



韓国禅寺で供された精進料理

（次回会合（第４９回世界遺産委員会）はトルコのイスタンブールで開催）
会合終盤の２８日に、次回の世界遺産委員会についての決定がされました。



次回（第４８回）世界遺産委員会議長のユルダクル・トルコ大使（写真出典：ユネスコ）

次回会合（第４９回）は、トルコのイスタンブールにおいて６月２７日から７月７日まで開催されることとなりました。議長はトルコのユネスコ大使であるムスタファ・ユルダクル大使が務めることとなります。ユルダクル大使は最近まで本国の外務省でシリア担当局長を務め、今年の春にパリに着任したばかりですが、今回の世界遺産委員会では委員国代表は早くも積極的に発言し、存在感を放っていました。

イスタンブールで開催されるのは、実は１１年ぶり２回目です。

前回開催されたのは、２０１６年７月。冒頭に紹介したル・コルビュジエの建築作品群が登録された第４０回会合ですが、期間中の７月１５日にクーデター未遂事件が発生し中断を余儀なくされた会合です（残りの議事はパリで再開）。少なからぬ犠牲者を出したこの事件は、トルコでは今でも衝撃を持って受け止められており、毎年７月１５日には世界各地のトルコ大使館・政府代表部において追悼の行事が行われています。

来年の会合が平穏な形で行われることを願ってやみません。

（世界遺産に関する新刊のお知らせ）

最後にお知らせです。

このたび、世界遺産検定を主催するＮＰＯ法人世界遺産アカデミーより、「世界遺産はどう決まる？今こそ知りたい世界遺産のしくみ！」が出版されました。昨年パリのユネスコ本部で開催された第４７回世界遺産委員会の模様に対する取材をもとに、世界遺産が決定されるプロセスや、昨年実際に登録された各国の世界遺産が紹介されています。世界遺産委員会の現場で日本政府代表団長として関わった私へのインタビューも掲載されています。

概要は以下の世界遺産検定のウェブサイトからご覧になれます。

<https://www.sekaken.jp/books/mh-books05/>

世界遺産への理解を深めたい方はぜひ手にとってみてください。



「世界遺産はどう決まる？今こそ知りたい世界遺産のしくみ！」（NPO法人世界遺産アカデミー）

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大